～CRYSIS NIGHT　～

神風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～

【Ｎコード】
Ｎ１３７７Ｖ

【作者名】
神風

【あらすじ】
西暦２５００年・・
この世は平和派の【ＤＡＲＫ　ＣＩＴＹ】と破壊派の【ＣＲＹＩＳＩＳ】
によって支配されていた！
主人公Ｒ・ビートと個性豊かな仲間が巻き起こすバトルファンタジー！

第1夜　夜の始まり（前書き）

初めまして！
今回が初投稿、初作品になります！
～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～　是非どうぞ！

第1夜　夜の始まり

西暦２５００年・・人類は２つの勢力によって支配されていた・・・・
その２つの勢力によって地球は滅び、新たなＷＯＲＬＤ（新世界）が生まれようとしていた。
２つの勢力のうちの１つ【ＤＡＲＫ　ＣＩＴＹ】はこの世に【平和】をもたらすため、
明日への希望を胸に剣を振るう。
相対するもう一つの勢力【ＣＲＹＩＳＩＳ】は【ＤＡＲＫ】とは逆に「この腐りきった世を終わらせてやる」という執念の下に集まった勢力である。

この物語はそんな相対する両者の死闘を描いたものである・・・
Ｒ・ビート。今年１６歳になる青年である。
ビートはただ北を目指していた。　――【ＤＡＲＫ】を目指して。

同時刻【ＤＡＲＫ　ＣＩＴＹ】総本部
キン！ガッ！ドン！
「まだだ！まだ血がみられる！かかってこいよ！」
血まみれになって戦っているのは【ＤＡＲＫ】戦闘部隊元帥、大蛇（オロチ）恭弥（きょうや）。
【ＤＡＲＫ】には【階級】（ランク）と呼ばれるものがあり、強さによりこれが決まる。
神王、大元帥、元帥、部隊長、副隊長、班長、副班長、兵士の順で構成されている。
「まったく・・恭弥も落ち着けよ・・」
こういっているのは、【ＤＡＲＫ】技術部隊元帥、アクア・ダイル。

その時！ダイルに鈍い鉄色の剣が迫っていた！
「ふ～こういうのが面倒なんだよ！」
すでにダイルは応戦していた。青い鉤爪状の剣で。
「なんか言ったかぁ！？ダイル！！」
「頭冷やせっつてんだろうが！！」
「お前もな」
そういった男はダイルの後ろで敵からの攻撃を防いでいた。――砂で。
「うるせーーんだよ！砂野郎！誰が助けろっつった！？」
これだからこいつらは・・」そういうと男は砂を手のような形に変え、周囲の敵を薙ぎ払った。
この砂男は【ＤＡＲＫ】偵察部隊元帥、ギラ・フォグマーツ。

「楽しそうじゃねぇか！！！」

その声はこの【ＣＩＴＹ】中に響き渡った。
ギラがつぶやいた。「あれか。今回のターゲットは。」
「俺の名は滋田元　竜二郎！！この町をぶっ潰しに来た！！」
そういうと、滋田元は腰に当てた４本の刀を高々く上に掲げた。
すると刀の先から炎が溢れはじめ、一気に【ＣＩＴＹ】の中を包み込んだ。
炎は敵味方を問わず焦土へと身をゆっくり、着実に焦がしていった。

「クハハハハ！どうだ！この町は終わったな！クッハハハハハ！」

その直後だった。すさまじい轟音と共に、炎は一瞬のうちに姿を消した。
またその数秒後には２つの刃を鞘にしまうカシャンという音がかすかに聞こえた。
滋田元には胸に大きな罰点を描いた傷痕があった。

「うそ・・だ・・ろ？」そう言っている彼の胸からは大柄な戦闘服からもくっきり
見えるほどの血が流れていた。そして悔しみの表情を見せながら地へと倒れていった。

「おいおい。なあ、なんでお前まで斬ってんだよ！」　「てめぇこそ！」

恭弥とダイルの声だった。なんと2人の一撃で滋田元を倒してしまったのだ。
するとどこからともなく、「た、大将が！」「に、逃げろーー！」
「早く船を出せ！」
などの悲劇の声が聞こえた。すると恭弥が言った。「ンな事させるカッーーー！！」

「沈めてやるよ・・死への大穴にな！」

そういうと恭弥は背負っていた４００Ｋｇはあろうかという
大斧をゆっくり柄から抜き、言った。
「食らえ！百鬼夜行‘滅’！！！」
その斬撃は黒く輝き、船を真っ二つにし、さらには爆発した。
滋田元の軍は空中船「派羅陀（パラダイス）意巣号」に乗り、１０万もの大軍で攻めてきた。
その軍を抹殺することが3人の元帥への大元帥が出した今回の指令だったのだ。
「おかしい・・・」「どうした恭弥？」ギラが聞いた。

「俺は確かに切った。でも爆破なんかさせてねぇぞ。」

するとその時、恭弥の右胸を黒い腕が貫いていた。

第1夜　夜の始まり（後書き）

いかがでしたか！？
今回が初投稿、初作品になりました！
良い点、悪い点、意見、要望、感想があれば、ドシドシお願いします！
これからも～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～
宜しくお願いします！
（第１話にしては主人公の出番少なかったかな～）

第2夜　生まれ変わりの夜（前書き）

～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～　第２夜（話）です！どうぞ！

第2夜　生まれ変わりの夜

一瞬の出来事だった。恭弥の右胸を黒い腕が貫いた。

「なんだ？・・・こりゃぁ・・・？」

黒い腕の男はその手を乱暴に抜き取った。
恭弥は倒れた。その胸からは大量の血が流れていた。
ギラがいち早く駆け寄り医療班を手配するよう命令した。
黒い腕の男はは少年だった。黒い腕は右腕であり、左腕は普通の腕で、鎖が巻きつけられていた。
右腕からは血が流れ、少年はそれを舐めた。

「コ・・・コハ、ダー・・・ク・・シ・・ティ？」

低い声で少年は言った。とてもではないが子供の声とは思えなかった。
その少年に、ダイルは斬りかかっていた。

「逆水」

ダイル言った。その途端、ダイルの後ろから滝のような勢いの水が一気に流れてきた。
水は少年にかかり、ダイルは後ろから斬撃の用意をしていた。
恐怖を感じないのか、少年は一歩も動かず、それどころか不気味に微笑んでいるようだった。

「ダーク・プラント！！」ダイルが言った。

剣は鉤爪から鞭のように変わり、巨大な食虫植物のような形になり、少年に食い掛かった。
すると少年はゆっくり手の平を広げ食虫植物のほうに手を伸ばした。その瞬間、ダイルの体は宙を舞っていた。浮いた体の上に少年は飛び掛かり、黒い腕の方で右腕を貫かんとしていた。
だがそれはできなかった。ギラガ阻止したからだ。
ギラは右腕を横にし人差し指と中指を立て、そのまま横に振った。
するとさっき使った砂が集まり、少年に巻きつき、手足を縛り、床にたたきつけた。

「グギャアアア！！！！ギシャァァァァァ！！」

うめき声をあげ、必死に抵抗した。が、砂の網は解けなかった。

「それは力では解ない。解くために必要なのは真の強さだ。」

そういってギラは指を元に戻した。
すると動けない少年のもとにダイルが向かっていった。ダイルは左中指に付けていた指輪を少年の額に当てて言った。

「水の神よ。彼に鎮静を。風の神よ。彼に微風を。雷の神よ。彼に意識という名の雷を！！」

と唱えた。すると少年には意識がなくなり、静かになった。と、思うとたちまち少年に意識が戻り、少年はゆっくりと立ち上がった。
少年は目をつむり、少しの間何かに集中している様子だった。
約1分後。少年は目を開けた。そして言葉を発した。

「俺の名前はR・ビート！！今日から【DAKU】にいれさせてもらうぜ！！」

第2夜　生まれ変わりの夜（後書き）

第2夜（話）でした！
本当に少しずつですが進ませていただきます！
これからもどうぞよろしくお願いします！

第3夜　敗北の夜（前書き）

～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～　第３夜（話）です。
どうぞ！

第3夜　敗北の夜

「何を言っている！！」ギラはもう砂の刀（サンド ソード）がビートの首に突き付けられていた。
「己の罪を恥じて死ね！」砂の刀（サンド ソード）はビートを切り刻んだ。

「おっと、あぶねーな！ま、これぐらいできねぇと【ＤＡＲＫ】に入るなってことか？」

ビートは空を舞っていた。何の変哲もなく飛んでいたその姿は陽気な天使のようだった。
しかも砂の網は解けている。

「腹立たしい！元帥の力を見せてやる！」

「お！戦いか！？やろうぜやろうぜ！！」

「そんなに死にたいか！！そこを動くなよ・・・」

ギラは後ろの腰辺りから右手で短剣をだし、自分の腹を刺そうとした。

「そこまでだ。」

止めたのは恭弥だった。恭弥はギラの右腕をつかみ、そのまま上に上げ、叩きつけた。
ギラは我に返ったのか倒れて数秒目を閉じていたが目を覚ますといつものように冷静さを取り戻した。

「敵討ちでもしようとしたのか？バカ野郎！俺が死ぬとでも思ったか！ハハハハッ！」

「そうだったな・・・どうかしてたよ俺は・・」

「ま、あいつとはどうあっても戦うしかねぇようだな」

その眼は明らかにビートを捉えていた。
彼の頭の中ははこれから始まる戦いのことでいっぱいだった。

「さぁ！！楽しくいこうじゃねぇか！ガキ！！」

後ろの腰からビートは右手で刀を抜き上に放り投げ、１回転してからもう一度右手で刀を持ち、言い放った。

「あんた元帥なんだろ！存分に楽しもうぜ！」

そういっている途中にはもうビートは飛び出していた。

同時刻【ＣＲＩＳＩＳ】南第４管理棟

「グア！」「ウグッ！」「グッ！・・・」

「この程度か・・・」

同時刻【ＣＲＩＳＩＳ】北第１管理棟

「迎撃準備開始！！急げ！早くしろ！グアアアアア！！」

「永遠に凍っとけ雑魚ども」

同時刻【ＣＲＩＳＩＳ】西第３管理棟

「動けねぇ・・・だれかぁ助けてくれえええええ！！！！」

「ふぅ・・・・」

同時刻【ＣＲＩＳＩＳ】東第２管理棟

「撃て！！ん・・・・どこだ？・・・上か！？グアッ！」

「忍びには勝・て・ね・え・の・ッ　・！」

【ＤＡＲＫ】総本部

「いいじゃねぇか！ノッてきたぜ！」恭弥は血だらけの体で言っていた。それも浴びた血はすべて返り血であることにも気づかずに。

「ハアッ・・・ハアッ・・・・・」ビートは重傷というレベルではなかった。

左腕の骨はすべて砕け、足に関しては両足とも折れている。胸には切り傷が大量にあり、その１つ１つから血が流れていた。だがあきらめない。いや、あきらめれないのだ。

（強ぇ・・・・）

初めて心の底からそう思った。ビートは生まれて１度も自分より相手のほうが強いと認めたことはなかった。だが、そのプライドは今砕け散った。無敗の名とともに。

「グッ・・・・・うおおおおおおおお！！！！」

剣を構え向かっていった。どうしても負けたくないのだ。その心だけが彼の闘争心を駆り立てた。

「無駄だぜ」

軽く斧で跳ね返された。当然の結果だと脳裏で思っていた。死ぬかもしれない。だが負けるのはもっといやだ。『本当に勝てるのか？』ともう1度自分に問いかけた。だが返事は帰ってこない。
そんなことを思いはせているうちにまた自分の左胸に斧が迫っていた。
必死に刀を構えようとした。だができなかった。
『怖かった』
その瞬間だった。ビートの左胸に大斧が直撃した。もう立ち上がれなかった。
ビートは初めて敗北を味わった。

第3夜　敗北の夜（後書き）

～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～　第３夜（話）でした！
これからもがんばります！
是非これからも意見等お願いします！

第４夜　乱入の夜（前書き）

第４話です。どぞ！

第４夜　乱入の夜

「ご愁傷さまだ・・・」

そういっている恭弥は戦闘不能状態のビートに最後の一撃を浴びせようとしていた。

だが倒れているビートは最後の力をふり絞り、言った。

「入らねぇといけねんだ・・・・どうしてもな・・・」

「だから言ったろ・・・俺に対して３０分持ったらってな」

そうだったのだ。ビートが斬りかかっていったとき、ビートの斬撃を素手で受け止めながら恭弥は言った。

「いいぜ。入れてやるよ・・・ただし俺と３０分、対等に遣り合えたらな！！！」

ビートが戦ったのはせいぜい１０分といったところだろうか。恭弥はもう斧を振りかざしながらその斧をビートへと向けた。

「覚悟はよかったと思うぜ。生まれ変わったらもう一度ここに来な。」

そう言い残し、恭弥は斧を叩きつけた。だが場内にはとてつもなく大きな轟音だけが響いた。

「何の真似だ？・・・ダイル」

「こいつには使い道がある。・・・・・と思ってな。」
ダイルが割って入った。恭弥は怒りの目をしていた。恭弥は皮肉を込めていった。
「はぁん・・・・どういう使い道だ？」
恭弥はそういいながらもダイルの剣に止められた斧に力を入れている。
「恭弥。お前はこいつをどうしたい？」ダイルが言った。その眼には明らかに何かがこもっていた。
恭弥は迷った。もちろん『殺したい』『決着をつけたい』などの言葉が見つかった。
だがその言葉を口が発しようとしなかった。
なぜだろう？考えた。これまで力だけで戦ってきた彼に考えるなどの言葉は無縁だった。
そのためか異常なまでの時間を使った気がした。もちろん、実際には全然経っていないのだが。
その反面、ダイルは微笑んだ。まるで、してやったといわんばかりの顔だ。
その顔を見ていた人物がいた。ギラだ。
どうやらギラもダイルの考えに気づいたようだ。

【ＤＡＲＫ】修行、特訓室

「はじめまして。私が第６次【ＤＡＲＫ】入隊募集　試験第２審査試験官　義侠弐剣（ぎきょうにけん）だ！ここからは私が審査を行う！」

入ってきた審査官が堂々と言った。さらにこう続けた。

「ここは君たち若手の新人をこの【ＤＡＲＫ】に採用する部屋だ。君たちはまだ第１審査に通っただけだ。この程度で浮かれ、初心を忘れるな！いいか！！！」

白髪染めのロングヘアー。どちらかといえば銀髪に近い。大量の傷がついた鎧を着て、片目には黒光りする眼帯を付け、後ろには骸骨がついた椅子に座り、刀を鞘に入れ、両手を柄の上においていた。鞘には「蒼紅激戦剣豪血煙闘技場優勝記念」と書かれていた。いかにもこれまで戦ってきたという過去を暗示するような格好をしていた。

「はい！！」

少年たちが言った。

「第６次【ＤＡＲＫ】入隊募集」への入隊条件は大きく分けて３つである。

１つ目はもちろん実力があること。
その実力を証明しなければもちろん審査に通らない。実力の証明の手段は問わないとのことだった。
この条件においては、全員がハイレベルで合格した。
虎を狩ってきた者もいれば、深海の宝を手にした者もいた。
２つ目は何かの流派を最低１つマスターしていること。
剣、銃、槍、鞭、ハンマー、斧、ナイフ、素手、挙げれば数えきれないほどある。
なんにしろ、何かの流派を完璧に覚えてこなければならない。
この条件も大半のものが突破していた。
３つ目は１０歳以上２０歳以下であること。

この条件で入隊を断念した者が大勢いるとの事だった。
なぜかというと【ＤＡＲＫ】の重役会議での事だった。
「若手の力が欲しい。」「幼いころからの力を気づかずに最大限に生かしきれてない者もいるのでは？」
などの意見が多く、この結果に至ったという。

「それではまず自己紹介から行っていただく！」弐剣が言った。

「ちょっと待った！」　何者かがドアを蹴飛ばし乱暴に入ってきた。

「誰だ貴様は！」　弐剣が怒鳴った。話の途中だったせいか余計に起こっている。

受験者は気を付けをしたまま目線は入口へとくぎ付けになっていた。

「ンな口きいてもいいのかな～？」笑いながら男は言った。

「なんだと！？」だが次の瞬間、弐剣は言葉を失った。

「あ・・・あなたはダイル様！！なぜここに？・・・あ、いえ！・・・無礼な事をいい、誠に申し訳ありません！」

「そうそう。お前の階級は所詮班長。俺は３つも上なんだよ～以後気を付けようね☆」

「はっ！しかと心得ました！今後こんなことが無いよう・・・」

「分かった分かった。もういいよ。その代わり急なんだけどこいつを試験に入れてやってくれ。」

「はっ！でその者はどちらに？」

ダイルの後ろに隠れていて見えなかったのだがドアの後ろには人がいた。

まぎれもない。R・ビートだった。

「こいつ。さ、いってきな。」

ビートは言った。

「すまねぇなみんな！なんか俺だけシードもらったみたいな感じでさ。まぁでも・・・」

次の言葉で受験者達は闘争心を駆り立てられた。ビートは受験者達を指さし言い放った。

「おめぇらみてぇなザコには負けねぇ！実力でここまで来たってことを証明してやる！！」

受験者全員の心のろうそくに業火が灯った。ろうそくを溶かすほどの勢いで。

第４夜　乱入の夜（後書き）

～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～４話いかがでしたか！？
次回はいよいよ試験が始まります！

第5夜　結束の夜（前書き）

～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～５話です。
今回は新キャラが続々登場です。

第5夜　結束の夜

受験者達は怒った。
いきなり入ってきた不届きものに、ここまで死ぬ思いで潜り抜けてきた
第1次審査を行わずに不戦勝で通ってきたあげく、雑魚呼ばわりされ、
おまけに宣戦布告をしてきた。これ以上の屈辱はあるだろうか？
重い空気が部屋中に響き渡った。ビートは無論こうなることを感じていた。
それはダイルと弐剣も同じだった。
ダイルが弐剣を肘で突いた。弐剣はうなずいた後、再び受験者達の前へ出た。

「え～それでは第2審査を行う。まず4人組になって、お互いで自己紹介をしてくれ。」

受験者達同士はもちろん面識がなかった。
本当に信用していいのか？慎重にしているせいかグループを作るのに時間がかかった。
ビートは自分が1番信用されていないと悟り、その場に立ちすくんでいた。
当然誰も話かけてこなかった。しかし、1人の少年がビートの前に現れ言った。

「なぁ一緒に組まねぇか？」

突然の申し入れだった。それにも驚いたが何より驚愕したのは申し入れをしてくる人物がいたということだった。

NOという答えは見つからなかった。

「ああ。いいぜ。でもなんで俺を？」

「雑魚って言われて黙ってるのがあるか？普通？」

ビートは納得した。裏を返せば1番目立っているのは自分だと思ったのだ。――別の意味で。

その少年は肩に十字架のマークの入れ墨らしきものがあった。手裏剣だろうか？

また、顔の鼻の部分に切り傷があり、腰には短剣、服の裏には手裏剣、撒菱、煙玉、巻物、クナイなど、いかにも忍者という格好だった。

残りの2人はその少年が連れてきた。

そして自己紹介が始まった。

「じゃ、俺から行くぜ。」あの忍者の少年だ。

ビートはあらかじめ配られていた『自己紹介ノ項』を見た。ビートは思った。

（絶ッッッッッ対あの教官が作ったやつだ・・・・渋ッ！！」

無いようにはこう記されていた。

自己紹介ノ項

一、紹介ノ発表事項

名称、会得流派、武器、戦闘形態（バトルスタイル）特技、力ノ証明ノ課題

弐、紹介終了後

各自二配布する『入門ノ項』を熟読。その後、最後に筆記されている『担当教師名称』とその位置まで班でいくこと。ただし、はぐれてはならない。

参、教師面会後

　各自の教師に出される『課題』を突破する事。そして合格印をもらい、試験官に合格印を見せ、合格。その後、第参審査へ。

（救いようのない和風野郎だ・・・・ソードって言っても知らないンじゃねぇのかな？）

「え～っと・・・何言うんだっけ？」

少年は『自己紹介ノ項』パラパラと見た。
覚えきれなかったのか見ながら言っている。

「俺様の名前はスター☆ビル！！えっと何て読むんだ？あ！俺は忍者と、体術を習ったぜ！・・多分。え～っと次は・・武器は色々あるな・・・とりあえず刀、手裏剣、クナイってとこかな。あ！でももっとあるんだぜ！うん！たくさん！たくさんな！最後は・・あ、最後じゃねぇや・・あれぇ？」

とまぁ呆れるほどに長くなり、頭に入ったのは、
名前・スター☆ビル、忍者であり、武器は多数、特技は、暗殺と、偵察。なしてきたのはなんと、
【ＣＲＩＳＩＳ】東第２管理棟を落としてきたとのことだった。聞いたことを覚えているうちに次の受験者になった。
鉄のよろいのようなものを着て、フードのようなものがついていた。後ろには大きく、長い鎖が丸められていた。

「俺の名前はチェーン・マテリアル・リール。鎖、鎖鎌、２つとも９段だ。まぁ８段でマスターなんだがな、。言った通り、武器は主に鎖だ。接近戦の場合は鎖鎌。特技か・・まぁ、自主練で編み出した拘束術だな。課題は　【ＣＲＩＳＩＳ】西第３管理棟を落として

きた。以上だ。」

どこからともなく班内で拍手が起こった。
これは分かりやすくすぐに頭に入った。だが知的な感じのせいか、すぐに忘れそうになる。
まぁだが覚えやすかった――――少なくともさっきよりは。

「次は俺だ。俺の名前は氷乱（ひょうらん）白（はく）。清水氷景流、突破弐段。武器は剣。特技は
氷の覇気。課題は【ＣＲＩＳＩＳ】北第１管理棟の墜落だ。」

水色のインナーに戦闘用の腰当、剣が脇差にしてあった。インナーには漢字で『氷蘭満華』と書いてあり、青髪。氷の名に相応しい、涼しげな印象だ。

続いてビートの番になった。

「俺の名前はＲ・ビート！会得したのはアルカナ・クラウンだ。武器は剣で、特技は～この右手の一撃だ。」

「おい！俺に撃ってみろよ！渾身の一撃をな！」ビルが挑戦してきた。

無論ビートが乗らない手はなかった。

「よし行くぜ！」

恭弥との戦闘で左手は使えず、体中包帯まみれだ。だが決してこの右腕だけには傷を負いたくなかったのだ。あの紛れもない恭弥を倒した右手には。

「こいよ！」ビルが言った。

ビートはビルの出していた両手のちょうど真ん中に思いきり一撃を浴びせた。

と、思ったのだったがビートは右手を抑え、座り込んでいた。

「グッ・・・・なんだ？」

「どうした？ビビッて殴れねぇのか？？ハハハハハ！」

「ま、いいや。お前に見せるまでもねぇょ・・・」

「ちぇ、つまんねぇの。」

こういった感じで自己紹介は終わった。するとリールが言った。

「おい。これが届いたぞ。」

そういうと本のようなものを白、ビル、ビートに投げた。

キャッチしてみてみると、それは『入門ノ項』だった。

入隊時の必要物、料金、行事、修行内容、などが書いてあった。

見ているとビルが

「学校の入学みてぇだな。」と言っていた。

確かに。とビートも納得した。

「これ入隊時の事しか書いてないけど、なんでもうこんなに入隊時のことを？第３試験だってあるのに。それにここで落ちる奴だって

いるはずだぜ？」ビートが疑問に思った。

すると白が言った。

「重役の奴らは多分俺らが全員合格するということを前提にこうしたんじゃないか？」

「この２次審査が？」

「ああ、多分な。」リールが話に入ってきた。

「なんでだ？」

「ああ、お前は知らなかったな。実は俺らが受けた第１審査。ものすごく厳しかったんだ。今の受験者はお前をいれて４０人いるんだが第１次審査の時は５０００人だったんだ。」白が言った。

「そこから一気に４０人まで！？あ、３９人だったな。またどうして？」

「最低でも１０人は採用すると言っていた。ここで人数を絞ったところで第３審査で実力を見たほうがはっきりするだろう。」リールが言った。

「なるほど・・・じゃあ重役も第１審査で４６６０人も落とすのは想定外だったってことか。」

「多分な。もっと俺らに期待を寄せていたからこその判断だったんだろう。」白が言った。

「さて、もうそろそろ行こうぜ・・暇になってきたよ。」ビルが口を挟んだ。

「待てよ。まだほかの班だっているし・・」ビートの言葉を白が遮った。

「いや、その通りだ。思惑が分かった今、俺たちでこの真相を突き止めよう。そのためには絶対にこの４人は試験に合格する必要がある。もっとも、今の話で合格することは決まったようなものだがな。」

「その通りだな。」「確かに・・」「じゃ、早く行こうぜ！」３人とも納得した。

「じゃ、行くか。場所は・・・修行室？だ。いくぞ。」

「ああ。」初めて声がそろった瞬間だった。

修行室？に向かう途中、白がつぶやいた。

「俺の予想では、教師では無く、元帥との試験だろうな。」

その瞬間、ビートは身震いした。
無論ダイルなのだといいのだが恭弥だったらどうするか？
『これから実戦訓練をするぜ！いいか！』
というのが思い浮かんだ。
恭弥意外でありますように・・
何度も何度も心の中で念じ続けた。
修行室？の前に着いた。
ドアはビルが開けた。

「やぁ・・・待ってたよ。」君たちが受験者かい？
その声はあの人物の声だった。

第5夜　結束の夜（後書き）

～ＣＲＹＳＩＳ　ＮＩＧＨＴ　～今回はいかがでしたか？
次週はいよいよ元帥（？）との試験です。
次回もお楽しみに！

第6夜　合格の夜

その部屋は暗く、電気がついていなかった。
その部屋は広く、十分に戦闘ができるほどの広さだった。
その部屋は煙たく、霧がかかっていた。まるでボイラー室のようだった。

そんな場所で聞いた声に対しビートは「この声は恭弥だ」と、ほぼ確信していた。だが1つだけ、不可解な点があった。恭弥はあんな口調で話していただろうか？
恭弥の口調はもっと荒々しく、もっと声が大きかったはずだ。
ビートはもう剣に手を当てていた。
――――恭弥の、いや、元帥の力を1番知っているのはこの受験者の自分だったから。
そんなビートの様子を察した白も自分の武器に手を当てた。そして、リール、ビルの順番に戦闘態勢に入った。そしてまた、声が聞こえた。

「ハッハッハッハッ。油断がないのは良いことだ。ハッハッハッハッ。だが・・・」
その瞬間ビートは感じた。（違う・・この声は恭弥じゃない・・・）
次の瞬間、ビート達に襲い掛かったのは、斬撃でも、武器でも、殺気でもない。『狂気』だった。
一気に霧が晴れたかと思うと、ビルは倒れていた。
ビルには左肩から、右腰に掛けて大きな切り傷があった。
すると焦った様子で白が言った。

「チッ・・・・・早速忍者がやられたか・・いいな・・・リール！！ビート！！」

「了解！！」リールが言った。「俺もだ！」ビートが続けて言った。
「ヒャッハッハッハッハッ！！！楽しい・・・楽しい楽しい楽しい楽しい楽しい・・・」
「なんだありゃ？」ビートが言った。
「後で究明しよう。今はあれを止めることだけを考えろ。」
白とビートの視線の先には鼠色をした白衣の形をしたものを身にまとい、黒いズボンをはいて、さらには大鎌を持ち、その先からはビルの血が流れていた。
そして舌を出して狂ったような眼をして笑っている男がいた。
リールはどうやら出口の確認をしに行ったようだった。
次の瞬間、白は斬りかかりに行った。剣を両手で持ち、男に突進していった。
だがその剣は何事もなく男の腹部を貫いた。
だが男は何事もなかったかのように言った。
「イタイ・・イタイ・・ツライ・・クルシイ・・ヒャハッハッハッハッ！！！！」
白は動けなかった。白の心は狂気に駆られてしまったのだ。
白は怖かった。自分がおかしくなることが。
白は恐ろしかった。自分の心が狂気に支配されるのが。
白の目からは生気が無くなりその場に倒れた。
その男は腹部に刺さった剣を抜き取り、自分の血を舐めた。すると満足したようにその剣を投げ捨てた。
そこにリールが戻ってきた。だが、リールは己の目を疑った。

リールはこの部屋に来てからの自分に起こった災難を1つ1つ細かく思い出した。

この部屋に入って怪しい声がし、本当に教師なのか？と考えていると白が戦闘態勢に入っていたので自分も戦闘態勢に入った。修行室？に入る前に白が計画した作戦通りに、俺は出口の確認に行った。そして全4か所の出口からはどこからも出ることはできず、元の位置に戻ろうとすると、霧が晴れ、何があったのかと思い、急いで戻るとそこには倒れた白に立ちすくんだビート。

最悪の展開だ。

これが白の作戦だった。

そう、彼らはずっと前から修行室？のドアの前に着くと、そこでゆっくり時間をかけ、大胆な作戦を練っていたのだ。

まずビートのアルカナ・クラウン（光の波動）で『闇の七魂』を探り、部屋の中に大量の『狂気』があることが分かった。危険だと踏んだ白は、次にビルの奥義の1つ、習得難易度十、秘術『時空分身の術』を使い、ビートたち本人の体を時空へと飛ばした。次に分身リールが出入り口をチェーンでドアを縛り、敵をこの部屋に封印した。リールが確認しに行ったのはもう一度チェーンを確認するためだったからなのだ。そして最後に白が次元を凍らせ、脱出し、本人たちが奇襲する。

という作戦だったのだ。

計算通りだった。男はビートに向かって鎌を向け突進してきた。

が、その時、急に後ろから体を鎖のようなもので縛られ、煙幕を食

らった。睡眠薬が入っていた。
男はたちまち眠りにつくと氷で起こされて、我に返った。
「う～ん・・・ここは？」
どうやら元に戻ったようだった。
ビートたちは荒い息を吐きながら、武器を収めた。
「！！まさかお前らが受験生か！？まずい・・薬を・・・」
「あの～俺らって合格？」ビルが言った。
「まさか俺を止めたのは・・・」
「俺らだけど・・・」ビートが自分に親指を立てていった。
「ああ。合格だ。しかし、俺を止めるなんて・・お前らすごいな・・・・・」男、いや、教師が言った。そして続けた。
「俺の名前はＧ・マッドネス・ロウだ。【ＤＡＲＫ】研究、開発部隊元帥だ。」
「やはり元帥だったか・・・・」白が小声で言った。
「手を出せ。ああ、どっちでもいい。合格印を押さないとな。」
そういうとロウはポケットからスタンプのようなものを出し、ビートたちの腕に押した。すると押したところから光がはなたれ、光が消えると腕には『合格元帥確認』と書いてある印が押してあった。

「じゃ集合場所に戻りな。」ロウが言うと、ビートが
「先生さっきはなんであんな・・・・」そういうと、
「何でもない。さっきのは試験だ。」そういった。
「では先生ありがとうございました！」こう言って修行室?を後にした。
帰り際に白が言った。
「やっぱりな・・・印に『元帥確認』と書いてあるから、ほかの班も元帥が試験の相手だったんだろうな・・・」
「いや、でもあんな策略よく思いついたな。これなら次も余裕だろ？」ビートが言った。
「分かんねえぜ。こんな出来レースをクリアしたって嬉しくねぇ！次でぜってぇ通ってやるぜ！！」ビルが思いっきり言った。
集合場所につき弐剣に手を見せると全員「よし。合格！！」と言われた。
残りの班が返ってきたが不合格者は誰もいなかった。
全員の班が戻ってくると弐剣が前に出て行った。
「さて、どの班も返ってきたようだな。おめでとう。今回は全員合格だ！」
そして次にダイルが言った

「さてと、みんなおめでとう！じゃぁ、次は俺についてこい！次は俺が試験官なんだからな！」

ビートはこのことを予知していた。
そのため、あまり驚かなかった。
他の受験者は元帥が試験官になったことで不安を隠しきれていなかった。――――もっともあの3人以外は。

「じゃ、いくぞ～」ダイルが言った。

さぁ本当の試験の始まりだ。

第7夜　熱闘前の朝

ビートは朝日で目を覚ました。
それでなくてもビルのいびきで起きていたかもしれないが。
白とリールはとっくに起きていたらしく、着替えを済ませ、朝食を食べていた。
ビートは腕時計を見ると7：47と、映っていた。
事は一昨日の夕方まで遡（さかのぼ）る。
第2試験を終えたビートたちは第3試験の前に2日間の休息兼、施設内見学の休みが与えられた。
聞くところによると第3試験はかなり厳しく、並大抵の体力では突破できない。
そこで弐剣は、見学も兼ね、休息の時間を与えた。
見学できる部屋は限られており、主に、
保健室、修行室?、?、?、司令室、展示室の4か所だけだ。
中でも聞いたときは修行室?には行きたくないと思った。あまりいい思い出ではなかったから。
現在ビートたちは【DARK】の隣に位置する、
【DARK】強化棟というドーム状の建物で休んでいた。
丸い円を描いている建物で、円の端に部屋が輪を描いて並んでいる。
部屋番号は【D】の8。メンバーは班で1つの部屋なのでもちろん、ビート、白、リール、ビルだった。第3試験ではバラバラになるそうだ。
そして今日は休息2日目。1日目と同じだが9時にドームの中心、【DESU】に集まらなければならなかった。そこで班で1日目に時間を決めたのだ。
起床は8：00。食事は8：15分までで、30分までに身支度。
そこから15分間武器の手入れ、45分になったら朝食の皿を調理室に返しに行く。50分に部屋を出発。

これで【ＤＥＳＵ】に着くのは５５分。と、いう予定だ。
ビートはベットから転がった。が、しかし自分は２段ベットの上にいることを知らずに下に転げ落ちた。落ちた後に自分を恥じた。

「痛ッテェェェェ・・・・・」ビートが寝ぼけながら言った。

「目覚ましが割には成ったかもな。」リールが言った。チェーンを巻き直しているようだ。

ビートが奥に向かうと、机の上にパンと牛乳、スープが置かれていた。

「またこれだけか・・・・・」ビートが腹を鳴らしながら言った。

ビートは残念そうな顔をしながらスプーンを手に取った。
スープを口に運んで啜った。おいしいとは言い難かった。
食べ終わる頃に時計を見ると８：１２分。代替予定通りだ。
そんな中ビルはまだ寝ている。着替えをしていると顔が見えた。
起こしてもよかったが悪戯本位で起こさなかった。
軽く笑いながらビートは剣を腰当にはめ込んだ。
その後歯磨きをして、顔を洗い、時計を見た。

「８：２４分か・・・白、リール！！トランプでもやるか？」と誘ったが２人とも武器の手入れをしていて、断られた。しょうがなくビートも剣を砥石に当てた。

８：４５。ビルは目を覚ました。

「ヨォ・・・ビート。ずいぶん速ェな・・・今何時だ？」ビルが聞いてきた。

「フフフ・・・今何時だと思う？」明らかに嫌味だった。

「えっ・・・・う～んとちょっと寝坊したから・・・８：１５分くらいか？」

「今、４７分だ。」意外と普通に言ったつもりだった。

「なんだ。７：４５か。まだ大丈夫。ん・・・まさか今８：４７？」

「そうだ。」その平然とした口調がビルにとっては絶望の一言だった。

「え～～～～～！！！！！ヤッバ！！！なんで起こさなかった！！白！！リール！！」

「起きないほうが悪いだろう。」「その通り。」２人とも冷静に言った。

追い打ちのようにビートが

「よし！じゃあ俺らは先に言っとくぜ。早く飯食って片づけて鍵閉めてこいよ。」と言った。

「確かに。そろそろ行くか。」白が言うと、リールも立ち上がってドアのほうに向かった。ビートもそれに続いた。

「卑怯だぞ！おい！！まてよ！お～い！！！」そんなビルの言葉を無視し、ビート達は部屋を出た。

【ＤＥＳＵ】に向かって歩き始めたのは４９分だった。
ドームは３階建てになっており、ビート達は１階。
２階からしか【ＤＥＳＵ】には入れない。
階段を上っていると白が言った。

「今思い出したがメンバー全員で行かなければならなかったんじゃないか？」

「あ・・・・」ビートが絶句した。

「俺ちょっと様子見てくる。」そういいながらビートが駆け出した。
後ろから何か聞こえたが適当に分かったと答えた。
部屋の鍵は閉まっていてビルは周辺にいなかった。

「チッ・・・・あいつどこ行ったんだ？」イライラして呟いた。

時計は５４分。１０：００まであと６分。
その後も思い当たる節を調べ続けたがビルの姿は無かった。
ドームの中を探し終えると５８分になっていた。
やむをえず、階段に戻ると白と、リールが待っていて急いでドームに入った。
すると声が聞こえた。

「遅ぇーよ！！早くしろよ！」ビルの声だ。

そうだ。ビートはビルが忍者ということを今思い出した。

第8夜　熱闘前の昼

「バーカ!!忍びの足をナメてんじゃねぇ!!」その言葉には確かに説得力があった。

「おいそこ!!早く座れ!!」弐剣が言った。最後に来たのはビート達だったからだ。

ビート達はビルの居る場所に腰を下ろした。

座ると間もなしに、話を始めた。

「え～今日が最後の休日となる!明日からは地獄の第3試験だ!第3試験は今日までの生活が天国と思えるほどに苦しい。その自覚を忘れるな!以上!!」

そういい、話が終わると思った。が、次の言葉で彼らは驚いた。

「それでは元帥、どうぞ。」そう言って、弐剣は受験者達の方へ寄った。

すると弐剣が話をしていた場所の下の床が動いてステージのような形になった。

その上にはダイルが乗っていた。

「じゃ、第2・5試験始めるぞ～」その言葉は受験者達を驚いた。

「おい、どういうこと?」「どうなってんだ?」「うそだろ・・」

「さぁ・・」

疑問の声が多数上がった。この事は受験者は誰1人聞いていない。
もちろん、この状況を理解しているものも
1人もいない。

「あれ？みんな聞いてないの？おい！弐剣しっかりしろよ～」

「えっ・・・・私はそんな事は聞いて・・・・フォグア！」

弐剣はその場に倒れた。
用意していたのかダイルは弐剣に石を投げつけていた。

「面倒だな～。えっと、すごく簡単に説明すると、お前らの中で俺と戦いたいって奴が立候補して、勝ったら第3試験を受けずに合格。負けたらそこで、さようなら。それだけだ。」

受験者達は驚愕した。勝てば第1試験より辛いであろう第3試験を受けずに合格することができる。が、相手は元帥、負けたら第3試験を受ける所かその場で脱落。当然ながらリスクが高すぎる。これなら石橋を叩いた方がいい。石橋を飛び越えて落ちるわけに訳にはいかないのだ。
だが、立候補者がいたのだ。いないであろう、立候補者が。
その受験者は起立した。足元からは「やめとけって・・」「死ぬかもしれないぞ？」などの声が多数聞こえた。そんな声を聴いていないのか、彼は言った。

「俺がいくぜ！勝負してくれ！」その少年は≪またも≫受験者達の心を熱くした。

「おまえか？R・ビート。」ダイルは決して〝ビート〟とは呼ばなかった。

しかも一切の贔屓(ひいき)ができない。悪魔で、『試験官』と『受験者』なのだから。
だが次の言葉はビートが知っているダイルとは別の目で、別の口調で言葉を発した。

「覚悟はいいな・・・後悔すんじゃねぇえぞ。」そういうと【ＤＥＳＵ】の端から観客席のようなものが上がってきた。
【ＤＥＳＵ】のダイルが登場した中心部の大穴は通常【ＨＥＬＬ　ＨＯＬＥ】と呼ばれており、落ちる、あるいは入って出てきた者はいないという。
また【ＤＥＳＵ】の円状になっている端の部分は４方に橋が架けられているだけで、残りは穴になっている。
その穴は観客席になっていている。しかもそれに囲まれ、逃げ場はない。だが幸いなことに、【ＨＥＬＬ　ＨＯＬＥ】は閉じられていた。

「俺だって本気(マジ)だぜ・・・いくぞォォォ！！！！」

ビートは素手で向かっていった。その姿を１番見ていたのはビル、白、リールだった。受験仲間として、否、友として。
ビートは左腕でダイルに殴り掛かった。が、その拳は右手に掴まれていた。
ダイルは左手に持った剣でビートを切ろうとした。
ビートは足を上げて顎を蹴った。外した、違う、避けられたのだ。
が、左手は自由になった。バックステップで距離を取り、再び向かっていった。
ダイルがビートに向かって斬ると、ビートはダイルの後ろにいた。

「そうか・・・お前、飛べたんだったな！」そう言ってジャンプして斬りかかってきた。

ビートはそれをしゃがんで避け、腹部を剣で切った。
「グッ・・」という声を無視し、背中に回り、左手で思いきり殴り飛ばした。
観客席にぶつかったダイルは煙でよく見えなかったが油断はできなかった。
ビートは後ろに殺気を感じた。黒い食虫植物。

「ダークプラントか！」なんとかアルカナ・クラウンを使い、ダークプラントを破った。

が、休息もつかの間、ビートは剣でダイルの剣を止めていた。
だが、背中に激痛を感じた。そう、まだダークプラントは残っていたのだ。
ビートは下に落下した。落下中のビートにダイルは空中から斬りかかった。
ビートは観客席の電流網に叩きつけられた。
またしてもそのまま下に落下して倒れた。電流が体に迸(ほとばし)る。
だが、ビートは立ち上がった。荒い息を吐きながら。
ビートは右腕の鋼鉄の手袋を取りながら小声で言った。

「へへ・・・こっからが本番！！」その枷(てぶくろ)は右腕から外されていた。

ビートは膝を曲げ左腕を前に突出し、右腕を思いきり後ろに引いた。
右腕を前に突き出したかと思うと、ダイルは血を吐き、胸を殴られ、吹き飛ばされていた。
その手は明らかに人間の物ではなかった。
ダイルが剣を構えて向かってきた。ダイルは右腕を斬った。
だが、その腕は鋼鉄のように硬かった。ビートは右腕でダイルの右頬を殴った。

吹っ飛んでいるダイルに滑空で追いついたビートは膝で腹を思いきり打ち、両手で叩きつけた。
受験者達は歓喜の声を上げた。

第9夜　熱闘前の午後

ビートの目はいつもの陽気な目では無かった。
その証拠に今もダイルを叩きつけた床を睨みつづけている。
叩きつけた反動で浮かび上がってきた砂埃のような物の中から人影が見えた。
影しか見えなかったが、その体の周辺から円状のオーラのような物が何かが思いきり響くような音とともにその体の周りを回転し始めた。
砂埃が晴れ、ビートは迎撃準備に入った。そして声が聞こえた。

「おもしれぇ・・・・お前、俺と同じくらい強ぇかもな。」

普通ならお世辞だと思うビートだったが、今はそんなことを微塵も思いはしない。
ダイルがもう1度剣を握るとオーラが消え、目の色が変わった。
これが、元帥の本当の眼・・・・ビートはそう思った。

「俺言ったよな・・・後悔するなってさ。撤回する。後悔させてやる！」

次の瞬間ダイルの剣がビートの右腕を切り裂いた。あんなに硬かったあの右腕を容易に。
ビートは剣を抜いて応戦した。ダイルが剣を振り、ビートはしゃがんで避けた。
するとしゃがんでいたビートの上からは無数のダークプラントが降り注いでいた。
なんとかアルカナ・クラウンで光の結界を張ってその場を凌いだ。
がそれもつかの間、ダイルが一瞬の内に光の結界に入り込んでいた

のだ。
真っ直ぐ突進してきたダイルの攻撃をジャンプしてかわし、剣の持ち方を逆にしてダイルの左半身を狙った。
その攻撃は見事に命中し、左肩から左足にかけて広範囲への攻撃に成功した。
だがビートは倒れた。警戒心を怠った。ここまでのすべてに意味があったのだ。計画の陰謀が大きすぎて気づけなかったのだ。
左腕を掴まれた時、顎に蹴りを入れようとした時、ダイルを叩きつけた時、右腕を切り裂かれた時、ダークプラントをかわした時、すべてが陰謀だったのだ。確実に読まれていたのだ。すべての行動を。
何よりも倒れる時に見たダイルの表情、あれですべてが仕組まれていることを悟ったのだ。
そう、左手首、足、両手、右手首、そして足元。
すべてにダークプラントを植え付けられていたのだ。
ビートが倒れると光の結界は壊れた。
そして、案の定、先ほど降ったダークプラントに体を喰い尽くされる。
ビートは初めて『力』ではなく、『知』に負けたのだった。
だが決して後悔はしていない。心のどこかで、負けることを知っていたのかもしれない。
意識が遠のいていく。嗚呼、死ぬのか。いや、まだ終われない。まだ・・・・
目を覚ました。目に見えたのは真っ白な天井と、自分。

壁は透き通っていて、自分の姿が見えるほどだったからだ。
ここが天国か。さほど嫌な所では無いな。
そんなどうでもいいことを考えながら彼はゆっくり起き上がった。
そして１つ１つ今どういった状態なのかを考えた。
服は全て着ていた。先ほどと、いや、生前と同じというべきか。剣もきちんとあった。
そして今自分はベットの上に横たわっていたことを知った。
ベットから降りると、巨大なガラス張りの窓があった。
外を見ると彼は驚愕した。有る筈が無い・・・いや、仮にそうだとしたらなぜ自分はこんなところに・・・納得がいかなかった。
外は大きな野球ドームの形をしていて、その中で約３～４０人が戦っている。
そう、外では第３試験が行われていたのだ。

第１０夜　熱闘前の謎

「どういうことなんだ・・・これはいったい？」
ここにいるのは自分１人ということも忘れ、呟いた。なぜなら絶対にありえない事が、目の前では起きているのだから。

「気づいたか。」その声は後ろからだった。振り向いてみると、声の主はギラだった。

ずいぶん久しぶりに会った気がする。だが、今となってはどうでもいい事だ。
ただ聞きたかったのだ。この状況を納得がいくように知りたかったのだ。

「教えてくれ！今なんで俺はここにいるんだ？なぜ外で第３試験が？」

ギラはそれに答えた。

「落ち着け、まず聞かせてくれ。お前はどこまで覚えているのかを。」

修羅道院（しゅらどういん）、深夜２時。

「ハァ・・ハァ・・・だめだ・・お前だけは・・・グア！」

「今思エバ懐カシキ現世ニ焦土ヲ呼バントス」

謎の部屋

「どういう意味だ？」ビートは問いかけた。

「お前はダイルにやられた。意識を失ってからどこからどこまでを覚えているんだ？」

「？俺は目が覚めたらここにいた。それだけしか覚えてないぜ。」

「そうか・・・・これは長くなるな。」

「急かすようだが早く教えてくれないか。」その言葉は確実に焦りが見えた

「そうだな。では初めから話そう。まずお前は気絶した後ダイルに身柄を引き取られた。ルール通りお前はここから追放されるはずだった。だがそこに3人の受験者が現れた。」

「まさか・・・ビルとリールと白のことか？」

「正解だ。もう1度チャンスを、第3試験に出してやってくれと言ってきた。だが、ダイルは承諾しなかった。『ルールだからだ』と言って決して承諾しなかった。」

「それとこの場所に何の関係が？」

「まぁ、待て。だが、もう1人反発者がいた。弐剣（にけん）だ。弐剣はダイルが元帥会議に行っている間にお前を助け出した。と言うよりお前を隔離した。」

「隔離？俺をここに？」

「そう。だがなぜ俺がここを知っているかというとあの３人だ。弐剣はあの３人と手引きし、こう言ったらしい。『ビートの身柄はギラ様の部屋の前にて休ませております。どうかあの者を第３試験に出してやってくださいと言って来い』とあの３人に言ったらしい。つまり、お前の友達を通訳にし、お前を助けさせた本人は弐剣だったということだ。」

「ちょっと待ってくれ。話は分かった。だが、いま俺はダイルに追われてるってことか？」

「そういうことだ。ようやく分かったか。さぁ入れ。」

ダイルが言うとドアの外から人が入ってきた。ダイルだ。
ビートは足がすくんだ。恐怖に心が刈られてしまった。

「手間かけさせんじゃねぇよ。探したんだぜ。さぁ来いよ。」

「ハハ。どこに行くんですか？」覚悟はできていた。いざとなれば殺しも仕方が無かった。

「決まってるだろ第３試験だ。」驚いた。

「本当は【ＨＥＬＬ　ＨＯＬＥ】にでも落としてやろうと思ったがな。ギラが泣きわめいて土下座なんかするもんだから仕方ねぇよ。」

「してねぇ。」ギラが言った。１００％してないとビートも思った。

「でも、外ではもう第３試験が行われているから無理だろ。」ビートは言った。

「あれ、リハーサル。」いつものダイルだった。

「ああ、なるほど。」

いよいよか、長かった気がする。そう思った。

第１１夜　熱闘前の夜

ビートが受験者達と合流したのは５：３０だった。
ダイルに連れてこられたコロシアムに着いた頃にはもうリハーサルは終了しており、そこで合流、部屋に戻った。部屋に戻るとまたあの予定通りに行動しなくてはならない。
６：２５まで休憩。６：３０から食堂へ。７：３０から８：３０まで部屋ごとに入浴。８：５０までには着替え、歯磨き等の身支度。
９：００に【ＤＥＳＵ】に集合。という予定だ。
帰り際には元帥との戦い、その後の行方など色々なことを質問をされた。――――芸能人の気分だ。
部屋に着いたのは５：４５分。これから４０分休憩だ。
部屋に全員が入るとビートは言った。

「みんなありがとな！」感謝の意を込めた。彼らが、友がいなければ、自分はここにはいなかったのだから。

「当たり前だろ！仲間なんだからよ！」ビルが返した。白とリールが微笑んでいるのが目に入った。

雑談の後、６：３０分。食堂に向かって歩いているビートたちの前を貫録のある軍隊が通り過ぎて行った。この２日では１度も目にしない光景だった。

「なんだ、ありゃぁ？」ビルが言った。疑問に思っているのはビートも同じだった。

食堂に着いたのが３２分。盆を取りに行こうとしたときにリールがあることに気付いた。

「おい、ビルはどうした？」

そういわれれば居ない・・・まさかあの軍隊を付けて？いや、それは無い。食堂の入り口まで一緒にいたからだ。だとすれば一体どこへ・・・・

とそこに聞き覚えのある声が聞こえた。

「お～い！お前らも早く取れよ！無くなっちまうぞ！」ビルだ。

そう、それは昨日のことだ。昨日も同じように食事があったのだ。

くそ！先を越された！

昨日１０月２日午後６：３３分

「なぁ！食事ってうまいのかな？朝みたいのじゃないといいけどな！楽しみだな！」

「ビル落ち着け。そこまで期待すると実物がショボかった時のダメージがでかいぞ。」

「ん？あれが入口だな！ヒャッホウ！！メシメシ！」

「聞けよ！」「やれやれ・・・あの２人は。」「まったくだな。」

こうして昨日は食堂に入った。中はバイキング形式になっており、生徒、教員、４０人の受験生達でおかずをとっていくので早くしないとすぐにおかずが無くなってしまう。

ちなみに昨日ビートが勝ち取ったおかずは、ハンバーグ、サラダ、

味噌汁。これでもいい方だという。

「てめー卑怯だろ！抜け駆けしやがって！」ビートは嫉妬していたのだろう。いつもより一際怒っていた。

「たかがおかずぐらいでそこまで怒るなって。」嫌味だ。

「ふざけんじゃねぇぞ！大体てめーなんだそのおかずの量！取っていい量のギリの範囲だろ！！計量機でも持ってきたのか！あん！？見とけよ！お前よりスレスレまで入れてやる！行くぞ！白！リール！あいつにギャフンと言わせてやるぞ！」

だがそこに白とリールはいなかった。2人ともビルと話しながら食事をしている。

「チッ・・」と言いながらおかずを取りに行くとそこには何も無かった。

『肉コーナー』『野菜コーナー』『魚コーナー』『トッピング・調味料コーナー』『デザート・フルーツコーナー』すべてが焼け野原と化していた。

「そ、そんな・・・・バカな・・・・」絶句したビートはご飯を茶碗に次ぐと、渋々ビル達の座るテーブルへと向かった。

「さぁビート君、どれだけのおかずを取ってきてくれたのかな～？」これも嫌味だ。

「クソっ・・・ってなんで白とリールそんなに取ってんだよ！可笑しいだろお前ら！」

リールが取ったおかずは、カレーライス、サラダ、ポテトフライ、

秋刀魚の塩焼き、ウーロン茶、チョコパフェ。

白は、タコ飯、から揚げ、筑前煮、刺身盛り合わせ、味噌汁、山菜セット、杏仁豆腐。抹茶。和食だ。

ビルは、ラーメン（特大）、タコ焼き、サンドイッチ、特製！ＢＩＧハンバーガー、卵焼き、カルビ、松茸と椎茸の旬野菜セット、寿司セット、エビ、タコ、イカ、三種の海鮮セット、コカコーラ。

ビートは、白米。以上。

「悲しいね～ビート君。おかずがないってことは・・・白米だけかい？フハハハ！」屈辱の言葉。

「くっそ～腹立つ！」当然である。

「なぁ～白～リール～ちょっとくれよ～お願い！」ねだった。彼は必死にねだった。

「『おかしいだろお前』って言われたんでね。与える気が失せた。」白が言う。

「助けてやった貸があるからな。」とリール。

「くそっ！なぁ頼むよ！譲ってくれよ！少しでいいから。な？」その時放送が入った。

「受験者のみなさん。入浴の用意ができました。各自浴場へ向かってください。」

「おっと失礼、ビート君。時間だ。行くとしよう。白君、リール君、ビート君もね！」

「クッッッソーーーーーーー！！！俺の飯がぁぁぁぁ！！！」
露天風呂で空に向かって叫んでいた。

「うるせーぞ！ビート！静かにしろ！」言わずとも誰かは分かるだろう。

「元はと言えば誰のせいだ！誰のせいで俺の飯が取れなかった！？６割はお前のせいだ！」

「俺そこまで取ってねぇぞ・・・」「うるせーーー！！！飯～～～」

部屋、８：４８分。

ビートは嘆き、喚きながら歯磨きをしていた。着替えが終わると、鍵を閉め、【ＤＥＳＵ】に向かった。着いたのは５８分だった。半分ほどの班が到着しており、ビートたちの班は７番目だった。最後の班がついたのは９：００丁度だった。最後の班が座ると、弐剣が話を初めた。

「全受験者に告ぐ！明日からはいよいよ第３試験だ！私とはここでお別れだが、別れあれば出会いありだ。次の試験はダイル元帥が審査官だ！そこでだ。最後に私と手合せしたい者はいるか！」

「はいはい！俺やる！」手を挙げたのは2人。ビートと、ビル。

「ほう・・・命知らず共めが・・・よい、2人ともかかってこい。」どうやら自信満々のようだ。

「じゃ、行きますよ～」ビートは自信ありげに言った。

「どこからでも来るがよいわ！」

次の瞬間だった。弐剣の体が爆発し、上空に吹き飛び、ビートが飛んで壁に向かってラリアットをかました。ラリアットは見事に炸裂し、弐剣は下に落ちて行った。そして下には手裏剣とクナイが大量に落ちていた。弐剣は見事にそれに突き刺さった。

「痛テテテテテ！！！」その目の前にビートとビルが笑顔で立っていた。

「いままで・・・」ビートが言った。そして2人でこう言った。

「ありがとうございました！」そういって2人で同時に弐剣を殴った。

弐剣は再び壁にぶつかり、手裏剣とクナイの山に落ちた。そして動かなくなった。

どこからともなく、「凄げぇぇ・・・」「つ、強い・・」などの声が上がった。

すると放送が入った。

「こんばんは～ダイルだ！今から【ＤＡＲＫ】の少年エリート部隊を送る。戦いたい奴は戦っとけよ～」

「少年エリート部隊？」「知ってるか？」「誰だよ・・」
驚愕の声は疑問の声に変った。すると北側の橋から４人の少年が現れた。
同い年？いや、きっと１つか２つ上だ。
そのうちの１人が言った。
「よぉ！受験生共！俺らはエリート部隊！お前らよりはちょっとばかし格が上だ。」
するともう１人の少年が言った。
「俺らはある人物から推薦を受けてエリート部隊に属している。」
「エリートねぇ・・・闘ろうじゃねぇか！」ビートが言った。
「俺も出よう。先ほどの放送で元帥の許可は出たはずだ。」白が立ち上がった。
「ヤレヤレ・・タンキナモノタチダ・・コマッタナ。ヤルカ？」３人目のエリート部隊だ。
「乗ってやろうじゃねぇか。」最初に言ったエリート部隊の少年が言った。
「ま、急くな。我は出んぞ。巧よ。」４人目のエリート部隊だ。
「コウ。ドウスル？」
「とりあえず俺は出る。それで決まりだ。おい！そこの３人！覚悟

はできてるな。」

始まる・・・・そう直感した。

「当たり前だ。」「おうよ！」「ああ。」

「おっと待った。名前を聞いておこう。俺の名前は伊崎巧（いざきこう）。」

「R・ビートだ。」「スター☆ビルだ！」「氷乱　白。」

「覚えとくぜ・・・いくぞ！！！！！」こちらに向かってきた。素手だ。

「火遁・炎球（えんきゅう）！」ビルが術を唱えた。

その火の球は巧目掛けて飛んで行った。

次の瞬間ビートは刀で鎌の攻撃を阻止していた。

「ほぅ・・・少しはやるようだな・・」鎌を持った男が言った。

「あんた・・名前は？」その表情は少し笑っていた。もちろん〝戦いの〟笑いだった。

「矢鎖武尊（やさたける）。」その鎌にはより一層力が加えられた。

同じく白も光る剣を刀でガードしていた。一度バックし、刀の持ち主に斬りかかっていった。

しかし、相手の剣によって、その攻撃は弾かれた。

「オレノナマエハ〝バラクス〟。オマエヲキルモノダ。」

「お前を斬るもの？フフフ・・・お前が斬られるとも知らずに！」
そこに鋭い槍が飛んできた。だがその槍は鎖によって止められた。
「不意打ちは止めとけよ・・・」
「主、名は何と申す？」
「チェーン・マテリアル・リール。」そういって鎖を投げつけた。
「そうか・・我は鬼紅坂卿（おにこうざかきょう）。始めよう・・・」

2時間後・・・
部屋、11：00。
ビート達はベットに横たわっていた。
エリート部隊との戦いは4つ巴の戦いとなり、そこに残った36人の受験生も参戦。
エリート部隊は1人10人の受験生を相手にしたが、結局は引き分け、という結果に終わった。
「なぁ。」ビートが部屋に響く声で言った。
「ここまで来たんだ！明日、絶対合格しような！」勇気づけのつもりで言った。だが、その言葉は意味が無かった。

ビル、リール、白は同時に言った。

「当然だ！」

第１２夜　熱闘開始！

「６：３０分か・・・まだ大丈夫だな・・・寝よ・・・」ビートが言った。いや、呟いた。

「よし。白、リール。準備できたか？」ビルが小声で囁く。

「あまり気は進まんがな。」リールが言った。

「よし、行くか。」白が言うと、３人は部屋を出て食堂へ向かった。

これはビートが起きる３０分前の話である。

「６：５５分かそろそろ起きるか。」そう言ってビートは起き上がった。昨日は２段ベットという事を忘れ、２階から床へ落ちてしまったので、今日は慎重に注意しながら降りた。

「さてと朝飯、朝飯。」まだ少し眠たいが食欲には代えられない。

テーブルに朝飯を取りに行くと、テーブルの上には何も置かれていなかった。おかしい。他の３人がもう朝食を終え、食器を食堂に持って行ったとしよう。だが、なぜ俺のまで・・・まさか！？俺のを食べたのか！いや・・・待てよ・・・その時ビートは根本的なことに気付いた。

「あいつらどこ行った！？・・・・・・まさか！！！」

１階食堂、７：１５分

「早く来て正解だったな・・・ビートが来たらどういうだろうか？」白が呟いた。

「その時はその時だ。」ビルは悪魔で余裕だ。

なぜ今日は朝食を食堂で行うのかというと無論、今日が第３試験当日だからだ。
体調を万全に保って試験に臨むための処置らしい。
そのため、今朝、食堂を使うのは受験生だけとなるのだ。
だがその分、大食いの受験生は大量の食べ物を食すことができるのだ。
しかも今日だけに限り、禁断のおかず「フルコース」が解禁されたため、さらなる混雑が予想されたのである。
つまり、食事をする人数が減ったところでおかずを取りあうための混戦になることに変わりはないのだ。
それを恐れた受験生達は食堂の開館時間６：４５分の１５分前、つまり、６：３０にはほとんどの受験生が起床していたのだ。

「確かに・・・そうだな。」リールも共感したようだ。

だが次のある人物の言葉で彼らは危機感を覚えた。

「見つけたぞ・・・・・・・貴様らァ！！！！！！！」７：３０分。

ついにビートがやって来たのだ。ビートは文句よりも先におかずのコーナーに急いだ。ただ焼け野原になってないことを願いながら。
だが、時すでに遅し。そこはもう焼け野原だった。４人のそれぞれの献立は、

ビート、白米。

ビル、　魚フルコース、山菜フルコース、肉フルコース、コカコーラ。

リール、中華フルコース、赤飯、サラダ、ソーダ、パフェ。

白、　白米、和食セット、鯛と鮪の刺身、抹茶。

ビートは白米を食べてはおかわりをするローテーションを繰り返していた。その５回目にビートは愚痴を零した。

「クソっ！ハメられた！早く起きるなら言ってくれってんだこん畜生！！！」

「だから俺昨日あれほど言ったろ！早く起きろって！」

そんなことで言い争っている間にダイルが食堂に入ってきた。

「よし！そろそろコロシアムに移動する！準備しろ！」

「どうする？もう準備するか？」リールが聞いた。

「ああ。そろそろ行こう。」白の一声で４人が立ち上がった。

ビートたちがコロシアムに着いたのは８：００丁度の事だった。全員がコロシアムに着いたのは８：０５分だった。リハーサルを行っている者はともかく、何をやるのか全く聞かされていないビートは心に不安を隠せなかった。だが、そんなビートをもっと不安にさ

せる出来事があった。なぜならリハーサルを受けた受験生でさえ手が震えている者がいるのだから。そんなことを考えているうちにアナウンスが入った。

「それでは、第3試験を始める！第1受験生前へ！」「はい！」

どこからか声が聞こえた。この４０人の誰か1人の。と思えば今度は全員コロシアムの観客席に向かった。どうすればいいのか悩んでいると白が肩を叩き耳元で「ついて来い」と囁いた。ついていくとビルとリールが座っている椅子を見つけそこに座った。コロシアムの中を見るとさっき呼ばれた受験生が1人でコロシアムに立っている。

するとコロシアムの北口から1人の人物が現れた。

それは昨日のエリート部隊の一人、伊崎　巧だ。するとまたアナウンスがはいり、

「第1受験生始め！」と言った。

と思えばアナウンスが終わった瞬間に巧は受験生に突進して行った。受験生は手にしているハンマーで巧を叩いた。が、巧は攻撃をかわし、背後に回って背中に思いきり蹴りを入れた。受験生は吹っ飛び、壁にぶつかり、地面に倒れた。すると、巧はジャンプして受験生の上空から受験生の腹部に蹴りを入れた。すると、またもアナウンスが入った。

「第1受験生失格！第2受験生！前へ！」「はい！」と聞こえた。

「分かったか？これがルールだ。」リールが聞いた。

「ああ。分かりやすくていいじゃねぇか・・・ゾクゾクしてきたぜ

！」ビートは言った。

すると変わったアナウンスが入った。

「第１０受験生失格！ここで試験官を交代する！伊崎　巧に代わり、第１１受験生～第２０受験者までは矢鎖（やさ）　武尊（たける）！」

大体ルールは分かったが１つ分からない事が有った。

「なぁ、リール。１つ質問。俺は何番目に闘うんだ？」それだけが分からなかったのだ。

「ああ。渡して無かったな。ホラよビート。」ビルがパスポートの様なものをポケットから取り出した。そこには『Ｒ・ビート１８番』と書いてあった。

ビートにとっては都合がよかった。昨日の決着を矢鎖　武尊と付ける事ができるからだ。

「大体２人前の奴が終わったら入口に向かえよ。」白が念を押した。

「そんぐらい分かるって。ん？１４番目が終わったな。そろそろ行くわ。」そう言ってビートは立ち上がって階段に向かった。

「ビート！！！！」ビルが止めた。そしてこう続けた。

「絶対ぇぇ勝てよ！負けたら許さねぇぞ！！！」投資を沸かせるつもりだった。生半可な返事をしたらぶん殴ってやろうと思った。だが、殴られたのは自分だった。

「人の心配する前に自分の心配しろよ！バ～～カ！」そう言ってビートは階段を降りて行った。

そして運命のアナウンスが鳴った。

「第１８受験生！前へ！」「はい！」そう言ってビートはコロシアムに入った。同時に入口の扉が閉じられた。ビートを見ながらビルは呟いた。

「ウッざ。」

第１３夜　熱闘！～ビート編～

「第１８受験生！始め！」その言葉でビートは構えた。

だが武尊は巧のように向かってこず、話を始めた。

「良い相手だ。決着（ケリ）を付けられる。」その顔には笑みが浮かんでいた。

「俺もそう思っていた所だよ！！！」そう言ってビートは剣を向けて向かって行った。

武尊がビートを見ると剣が浮いているだけだった。

「そこか・・・」その眼は武尊の真上に向けられていた。

「バレちまったモンはしょうがねぇ！いくぜ！！」ビートは左腕で上空から武尊を狙った。

だが武尊の鎌でその攻撃は阻止された。攻撃が阻止された瞬間にビートは地面に落ちている剣を取って武尊の足を斬った。

だが、その攻撃もジャンプされて避けられてしまい、鎌でビートは攻撃された。なんとか剣で鎌を止めたものの、しゃがんだ状態でこの体勢を保つのは困難を極める。鎌を静止した剣を持つ右腕が震える。渾身の力を込めてその鎌を打ち上げた。隙をついてビートは武尊の首に剣を突き付けた。

「少しはやるようだな・・・だが甘い！」次の瞬間、ビートは足元をすくわれた。

足を蹴られたのだ。武尊は素早くジャンプして鎌を取ると、ビートの腹部を斬りつけた。

「ぐっ・・・・」斬られた箇所からは血が流れていた。

ビートは立ち上がって剣を鞘に納めた。そして右腕の手袋を取り始めた。

「やっぱ使わねぇと倒せそうにないな・・・・」そして手袋を取り終えた。

「！ダイル元帥を追い込んだ右腕か・・・まぁ良い。」そして鎌を持って向かってきた。

ビートは右腕を思いきり武尊の方に向けた。すると、どういう事か武尊は金縛りにあったかのように動けなくなった。

「ああ。悪りぃ。ダイル元帥の時は加減した。言っとくけど、右手出した俺は負けねぇぜ！」そう言ってビートから向かっていった。

ビートは武尊の元へ向かうと容赦無く武尊を殴りまくった。だがその攻撃はすべて武尊が阻止する。どうやら金縛りは解けたようだ。少年はただ殴り続けた。だが、逆にもう1人の少年もそれに応えるように黙々と鎌を振り続ける。武尊が1度バックして鎌を床に刺し、鎌の柄の部分に器用に乗った。すると、ビートにこう言った。

「フフフ・・・こんなに楽しい戦いがあるとはな・・・良いだろう。使うとしようか。」その姿を見て巧が言った。

「まったく・・・あいつが俺らの中で1番戦いを楽しんでやがるぜ。受験生ごときに『刻印　解放』をするとはな。」

武尊は右手を上に挙げ、左手をその真下に持っていった。そして円を描くように上下の手を反転させた。そしてその両手を拳に変え、言った。

「『刻印　解放』！！二天狂王鎌（にてんきょうおうがま）！！」その瞬間、武尊の周りを闇色の光が包み込んだ。

１０秒ほど時間が経ってからその光は霧が晴れるように消えて入った。そしてそこには変わり果てた武尊の姿があった。

その姿はここにいるエリート部隊とダイル以外のものをすべて驚愕させた。観客席の白が言った。

「なんだ？・・・・・あれは・・・・・悪魔？」その姿は白をも、絶句させるほどだった。

武尊の腕は木の枝のように細くなり黒い髪が腰の辺まで垂れていた。目の色は人間で言う、黒目が緑色に、白目が黒に変色していた。背中から大きな蜘蛛の巣のような物が付着しており、そこには2本の鎌が納められていた。まるで武尊とは別人のような存在だった。

変わり果てた武尊はゆっくり、ビートの方に近づいて行った。ビートは自然に後退していた。体が思うように動かなかった。

武尊が足で踏んだ場所は黒く変色し、腐っていった。ビートが我に返り、武尊に向かっていった。ビートは右腕で武尊の顔を殴った。が、武尊はビクともせずに声を出した。

「ククククク・・・・いくぜ・・・・死ね！」武尊は鎌を両手で取り、クロスを描くようにビートの腹を切り裂いた。

それは普通の痛みとは違った。まるで心までが切り刻まれるような感触だった。ビートはその場に倒れ込んだ。そこにまたも鎌が降る。左足、右腕を鎌で刺された。

「グアアアア！」ビートは喚いた。完全に成す術を失くした。ビートはポケットから何かを取り出した。

「これが・・・・・最後の・・手段か・・一か・・八か」ビートはそのスイッチを押した。

するとそのボールからとてつもなく眩しい光がコロシアムを包んだ。少年の人生最後を賭けたボールの正体は閃光玉だったのだ。「終わった。」そう思った。だが、その光で武尊の容態が急変した。

「ガアアア！！！アア・・・アアア！！！」武尊はその場に座り込んだ。

ビートは全てを察知した。眩い光の中で彼は武尊を攻略したのだ。すべての鍵は『アルカナ・クラウン』だった。
ビートは傷口を押さえて立ち上がり、手を合わせ光の波動を武尊に発動した。武尊は喚き声を上げながら元の姿に戻っていった。座り込んでいた武尊は床に倒れた。ビートは勝利したのだ。

「第１８受験生合格！第１９受験生前へ！」「はい！」意識が遠のいて行った。

ただ自分が勝ったことは鮮明に覚えている。その傷が勲章のように思えた。あの光の中でビートはアルカナ・クラウンの能力を思い出したのだ。

「悪の根源『闇の七魂』を感知し、それを破らんもの」
ビートはあの武尊は異常だと判断し、『闇の七魂』を感知、その1つ『怨念』を発見し、武尊の心の中の『怨念』を砕いた。しかも、怨念は光に弱い。好都合だった。
ビートは何時の事か、眠りに付いていた。

第１４話　熱闘！～白編～

「『刻印　解放』！？」ビルが驚愕した。

「ああ。そうだ。資料の中から見つけた。この部分だ。見てくれ。」リールは本の１文を指しながら言った。

「『すべての武器において魂の入っていない物など存在しない。その魂を自分の物とし、使いこなすことができたなら、その者は限界を超える戦士となるであろう。その魂を開くにはその剣の　刻印を開放する必要があるだろう。』なるほどな。『魂を使いこなす』か。」この話が始まったのはビートと武尊の戦いを見終わった後だ。

あの戦いの最中、明らかに武尊の様子がおかしくなった。そのことについて彼らは研究していたのだ。その為には何かの動作、言葉、行動などの変わった動きがあったはずだ。そして見つけたのが、鎌の柄に乗って『刻印　解放』と言った時だ。あの瞬間に、闇色の光が放たれてあの姿になった。

「よし。そろそろ行ってくる。」白の順番が回ってきたのだ。

「ああ。勝てよ！」リールが言った。もちろんそのつもりだ。

「負けんじゃねぇぞ！」ビルも言った。

白の番号は２９。また、本当なら２０番まで武尊が相手をするはずだったがビートとの戦いで戦闘不能となり、残りの２人～３０番、つまり、１９番～３０番までの審査員はバラクスが務めることになった。ここまでの合格者はビートを含め５人。ビート以外は制限時

間まで立ち上がっていたものが合格した。そしてついに、その時が来た。

「第２９受験生！前へ！」「はい！」白はコロシアムに入っていった。

コロシアムは２８人分の血で床が赤く染まっている。５人毎に清掃されているのだが。

すると、バラクスが白に向かって言った。

「オマエカヒョウラン・・・コノトキヲマッテイタゾ。」

「ああ。俺もだ。」もう剣はぶつかっていた。

白はジャンプしてバラクスの後ろに回り、剣を持っていない左手でバラクスの背中に手のひらを付けた。

「氷（ひょう）！」掛け声と共にバラクスの背中は低温火傷した。

「ムム・・・スコシハヤルヨウダナ」すると腰から水色の剣を取り出し、両手で柄を持った。

「タケルガタノシメルワケダ・・『コクイン　カイホウ』！メタル・ボーグ！！」解放の掛け声えと共に青い光がコロシアムを包んだ。

「来たか・・・『刻印　解放』・・」光の中からバラクスが出てきた。

その格好はまるで小さな要塞だ。両肩からはロケットランチャー、胴から腰にかけては重厚戦車のような形をして、足は超鋼鉄ででき

ており、頭部は丈夫そうなヘルメットのような物が付いている。腕も機械のような物がついておりまさに要塞だ。

「ゲキタイジュンビハデキタ・・・イクゾ！！ハク！！」靴の裏のブースターから炎が発射され、滑空状態で向かってきた。武器は巨大なマシンガンになっている。

「凍土の世界に魅入られよ・・・天氷（てんひょう）！！！」その掛け声とともにコロシアム内が凍りついた。

「氷壁（こおりかべ）！！」すると、白の足元の氷が盛り上がってきて壁になった。だが、その壁はバラクスの突きで崩された。それどころか貫通して白の腹まで貫いた。いつの間にかバラクスの武器はドリルに変わっていた。さらに吹き飛んだ白にバラクスは追い打ちをかけた。

「モードチェンジ！！タイプD＝マシンガン！！！」するとまたもドリルがマシンガンへと変化した。

そのマシンガンで吹き飛んだ白に乱射した。すさまじい轟音と共におよそ5万の銃弾が白を襲う。

「くそ・・・どうすれば・・」白は血まみれになっている。空中から落下中にバラクスが追撃してきた。

その武器はドリルでも、マシンガンでも無い。ハンマーだった。その大きさは家1つ分ほどの大きさだ。いままさに止めを刺さんとしている。

「コレデオワリダ。ハク。イチゲキデキメテヤル。」そう言ってハ

ンマーを白に叩きつけた。
彼は血まみれになって倒れた。赤い血が凍土に流れた。一同は唖然としていた。なぜなら倒れたのは白ではなかったのだから。
「キサマ・・・ナニヲシタ！！クソ・・・・オレノマケカ・・」そう言って目を閉じた。
白は剣を〆の字に振って血を払い、刀を収めた。その後、白は全身から血を出し、倒れた。
「フッ。これで俺も・・勝った・・・・」その場所は血で赤く染まり、止まることなくそこにも雪が降り続ける。
白は清水氷景流の真の力をあの一撃の時にぶつけたのだ。その名前は『氷鏡（こおりかがみ）』。対象の攻撃を１度体で受け、その攻撃を倍にして返す。相手の武器が自分の体に当たった瞬間に相手にその倍のダメージを与えるので、絶妙なタイミングで発動しなければならない。何よりもその一撃を放つ瞬間にダメージを受けて失敗すると相手の攻撃＋その２倍のダメージつまり３倍の攻撃が返ってくる。
白はそれに自分の攻撃を加えたため、さらなるダメージを与え、一撃でバラクスを倒した。その反面、反動も計り知れないほど受けたので体が耐え切れなかったのだ。
すぐに医療班が駆けつけ、白とバラクスを担架に乗せた。そして判定が言い渡された。
「第２９受験生！合格！第３０受験生！前へ！」「はい！」
担架で医療室に運ばれる途中に控室に行く途中のリールとすれ違った。無意識に手が伸びた。

「よくやった。」ハイタッチをした。

もう頭の中では戦いの記憶をほとんど思い出せない。意識が遠くなっていく。

だが決して忘れない。勝利したことを。打ち勝ったことを。合格したことを。

それだけは、心に永久凍結しているから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1377v/

～ＣＲＹＳＩＳＮＩＧＨＴ　～

2011年10月9日11時28分発行